

日本語学習者の主体性をどのように引き出すか

日本語教育実践研究（5）を振り返って

1. はじめに

筆者は、日本語教育実践研究（5）（以下、「実践（5）」）において、「打つ」日本語授業の教育実践を行った。この実践（5）における経験から、本題にも掲げた「日本語学習者の主体性をどのように引き出すか」ということについて学びを得た。そのため、本稿では、実践（5）の目標をもとに振り返りを行い、それを踏まえた上で、「日本語学習者の主体性をどのように引き出すか」について考察を行う。

2. 担当授業について

2-1. 位置づけとその概要

筆者が今回、教育実践に携わったのは、『「わたしのにほんご」プロジェクト 1-2』ⁱ（以下、「わたにほ」）というクラスである。「わたにほ」は、日本語教育研究センター（Center for Japanese Language, CJL）のテーマ科目として水曜2限に開講されるクラスであり、小林ミナ教授が担当している。

なお、「わたにほ」は、以下に示す、2つの問題意識から出発している。

（1）これまでの日本語教育は、すべて「言語を状況から切り離して教える」アプローチをとっていた。

（2）これからの日本語教育は、「言語を状況から切り離さないで教える」「状況のなかで言語とコミュニケーションをとらえる」アプローチをとるべきである。

（実践（5）「ガイダンス資料」スライド）

この問題意識から、「わたにほ」は、その目指す教育実践について、以下のように記されている。

『「わたしのにほんご」プロジェクト 1-2』は、教室を「教室の外のコミュニケーションをメタ的にとらえ直す場」と位置づけている。学習者が「日本語で話したい／書きたいこと」「日本語で話したかった／書きたかったが、うまくいかなかった経験」などをもち寄ることにより、自分らしいコミュニケーションを日本語で実現できるように、「文型」や「表現（機能）」から出発するのではなく、「状況」のなかで言語とコミュニケーションをとらえる教育実践を目指す。

（「小林ミナ研究室」ホームページ）

筆者は、実践（５）において、このような目標を掲げる「わたにほ」で教育実践を行い、小林ミナ教授のもとで「たまご先生」ⁱⁱと、よりよい授業実践のための考察を深めてきた。

2-2. 目標

実践（５）では、「わたにほ」でのよりよい授業実践に向けて、3点の授業目標がある。

（１） 「文型」や「表現（機能）」から出発するのではなく、「状況のなかで言語とコミュニケーションをとらえる」教育実践を理解し、実現する。

（２） 1人ひとりの学習者にとって「+1」になる活動を組み立て、実践する。

（３） （学期開始時に、各自で「私の目標」を立てる。）

（実践（５）「ガイダンス資料」スライド）

筆者は、（３）に示す「私の目標」を以下の様に設定した。

1. 学習者の背景を最大限想像し（できるところは事前に情報を集め）、学習者の主体性のもとに成り立った実践を行う。

2. 私自身はサポートにまわるという意識を常に持ち実践を行う。

（Moodle 「私の目標」を書き込む掲示板です）

2-3. 担当授業「SNS にコメントする」

筆者は、「Lesson 1 0 __SNS にコメントする（React with comments on SNS）」ⁱⁱⁱというテーマの授業を担当した。以下に、筆者が実施した授業内容を、その流れとともに示す。

STEP1：日本語のコメントを集める

1. SNS を見る
2. 日本語の投稿を探す
3. 日本語のコメントを探す
4. スプレッドシートに書く

STEP2：投稿にコメントする

1. Padlet を開く
2. 皆の投稿を見る
3. コメントする
4. コメントに返事をする

授業の流れには、STEP1 と STEP2 がある。STEP1 では、スプレッドシートを活用し、SNS のコメント欄にある日本語のコメント表現を集める活動を行った。その目的は、2で「返信する」という活動があるため、その活動に向けてインプットを補うためである。その際のインプットについて、量と質の確保が必要であると考え、学習者が普段使っている SNS を公開した。ここでいう「質」の確保とは、学習者が自身の興味関心に沿ったインプットを得ることである。加えて、STEP2 においては、前回の「Lesson 1 0 __SNS に投稿する」と

いう授業と連携を図り、padlet を使用した。以前、学習者が投稿したものに、コメントするという活動を設けたのである。

また、Pre-task では、「日本語のコメントが沢山付いている投稿を3つ探す」というメインとなる課題を出した。STEP 1 において日本語の投稿を見る活動を設定したが、学習者によっては、日本語の投稿を普段閲覧しないことから活動に難しさを感じる学習者もいると予想し、事前にやってもらうことでその課題を乗り越えた。

Post-task では、「自分の好きな日本語のコメントを3つ述べる」という課題を設定した。興味関心に合わせた日本語を学習してもらいたいという思いから、好きな日本語を見つけられたか確認する目的があった。

3. 振り返り

「2-2. 目標」で挙げた3点の目標の各項目について振り返りを行う。

3-1. 目標(1)の振り返り

(1)「文型」や「表現(機能)」から出発するのではなく、「状況のなかで言語とコミュニケーションをとらえる」教育実践を理解し、実現する。

目標(1)について、最終的な授業のデザインでは、達成できたのではないかと振り返る。しかし、この目標を具体的な授業案に落とし込めるようになるまでには、いろいろな授業内容の変更があり、容易ではなかった。以下には、どのように、筆者が「「文型」や「表現(機能)」から出発するのではなく、「状況のなかで言語とコミュニケーションをとらえる」教育実践」を理解し、実現できたと考えるのかを記す。

筆者の担当授業テーマは、「SNS にコメントする」であった。授業考案の際、全体的な流れとして最終的には、「padlet にコメントする」というアウトプットの活動を設けた。学習者が最終的な姿として「コメントできる」ようになるためには、前段階の活動として、コメント表現のインプットの活動が必要であると考えた。そこではじめて、筆者は、「状況のなかで言語とコミュニケーションをとらえる」という壁にぶつかった。それは、インプットの活動を行うためには、授業設計として、その学習内容が問われるからである。

はじめ、筆者は、SNS にコメントするためのインプットとしてどのような学習内容が必要であるのかを考えた。ここでは、普段学習者が SNS を利用するときにはそれぞれの趣味に関する情報に触れることが多いと予測し、学習者の状況に合ったインプットを選定することが必要であると考えた。そこで、筆者は、これまでの授業の情報から学習者の興味について情報を集めてみた。例えば、猫が好きな学習者には、インプットとして猫に関する SNS 表現を与えるのが良いというように考えていた。このように、学習者の趣味を一つずつ拾い上げてそれらをまとめて、授業全体で扱う「SNS の日本語表現」というような学習内容を作成した。だが、ここで気づいたのは、1 人の学習者の視点に立った時に、その学習者に必

要な SNS の表現は、例えば、「猫に関する表現」それだけであるということだった。要するに、学習者一人一人に、固有の「状況」が存在するため、「状況の中で言語とコミュニケーションを捉える」ためには、究極を言えば、教師が一括した学習内容を設定することは不可能であるということであった。特に、SNS 表現には、固定的な決められた表現があるわけではなく、人々が自由に表現する場が SNS であり、ここでいう「学習者の状況」とは、「学習者の興味関心」にあたるからである。当然、興味関心は学習者一人一人によって異なる。そのため、教師が、学習者の状況（興味・関心）に沿った学習内容として、与えられるインプットは無いのではないかと考えた。

それでは、SNS における日本語授業として、どのような授業デザインなら、学習者一人一人異なる興味関心に合わせたインプットを得ることができるのか。ここで、筆者が辿り着いたのは、「リアルな SNS を公開し学習者に大量のインプットに出会わせる」という案であった。ここでのインプットは、教師が調整した学習内容を提示することによるものではなく、個々の学習者が選んだものにするという点が重要である。これなら、学習者それぞれに適したインプットを学習者自身が選び、質のいいインプットの学習をすることができる。

これは、STEP 1「日本語表現を集める」という活動において、スプレッドシートに集めてもらうという活動に落とし込んだ。スプレッドシートを採用したのは、他の学習者が集めた SNS の日本語表現を共有することで、教室活動だからこそできる協働学習の要素を加える必要があると考えたからである。また、クラスメイトの SNS での興味関心を知ることでもできるため、学習者間の対話が生まれると期待した。ここでは、SNS の中から自由に日本語表現を集めるように指示したので、実際に、学習者は自分の気になった SNS の投稿から、気になる表現を集めていた。例えば、この授業の Post-task^{iv}では、学生からこのようなコメントがあった。

表計算ソフトに使用したコメントから、おもしろくて複雑なスラングをたくさん学びました。私の好きなコメントは、「www」「めっちゃカッコいい」「うぼつです」です。「草」の笑う意味の由来は、「わらう」→「www」→「草」だと知りました。ニコニコ動画で「う p 乙」という面白い言葉も知りました。私は NND の歌やカバーが好きなので、学べてよかったです。

(Post-task, 「わたしのほんご」プロジェクト 1-2)

この学生は、NND の歌が好きな学生であり、そのようなジャンルの SNS 投稿から日本語表現を集めたようである。

「ヤバイ」はいろいろな意味がありますが、要は、誰かがこのコメントをすると、あなたの投稿を気に入っていることを意味します。このコメントは、友人との日常会

話で使われることが多いので、私は気に入っています。

(Post-task, 「わたしのほんご」プロジェクト 1-2)

この学生は、友人の投稿にコメントしたいという思いから、友人関係で使われる SNS コメントの表現に注目したようである。「SNS にコメントする」と言っても、友だちの投稿、公式アカウントの投稿、趣味アカウントの投稿、勉強アカウントの投稿、芸能人の投稿など、SNS には様々な用途があり、その状況によって使用する SNS 表現は変わってくる。このように、学生の振り返りから、学習者は、自身の興味関心に基づくインプットを得られたということが分かった。

また、授業の様子について、他の「たまご先生」からこのようなコメントがあった。

学習者と日本語のコメントを探すために関心事に対する対話もたくさんしました。そうしながら学習者の好みを知るきっかけになってもっと近い感じでした。確かに好きなこと(自分のこと)について話せば、学習者が積極的に話し、コメントも一生懸命打ちました。sns を通じてお互いの関心事や日常を共有することが外国語を楽しく学べる方法でもあることに気づきました。

(Moodle 「Lesson10_振り返り」)

このように、自分の興味関心に基づく活動であったため、学習者間やたまご先生との協働学習も育まれやすかったようである。

このことから、その大部分が、個人の興味関心で使用されるという特徴を持つ SNS の日本語授業では、教師が与えるのではなく、学生が選ぶインプットを学ぶという仕組みが良いのではないかと考える。興味関心に基づき集められた SNS 表現は、SNS を使用するとき、その学習者に必要で必須となる表現だからである。

筆者は、このことにより、「文型」や「表現(機能)」から出発するのではなく、状況の中で言語とコミュニケーションを捉える」教育実践を実現することができたのではないかと考える。

3-2. 目標(2)の振り返り

(2) 1人ひとりの学習者にとって「+1」になる活動を組み立て、実践する。

目標(2)について、まずは、「1人ひとりの学習者にとって「+1」になる活動」とは何かについて筆者の考えを記し、その観点からこの評価について述べる。

まず、「1人ひとりの学習者にとって「+1」になる活動」を、「この日本語授業の教室を出た後でそこで学びが活きる活動」と捉えた観点から考えると、ある程度達成されたので

はないかと考える。例えば、Post-task での学習者のコメントでは、以下のようなものがあった。

言葉と音が混在していること（例えばうわぁ "は "すごい "の意味）、"w w w w"は "笑 "の意味など、意外な音も混ざっています。また、すべてのコメントが非常に肯定的であることも興味深い。すっごくかわいい!最高! すごい!」なんて甘いですね。時々、会話が始まるというより、その場限りのリアクションのようなコメントもありますが、どちらかというとなんか発声に近い。

(Post-task, 「わたしのにほんご」プロジェクト 1-2)

日本のソーシャルメディアユーザーと欧米のソーシャルメディアユーザーのハッシュタグの使い方の違いはとても面白いと思った。

(Post-task, 「わたしのにほんご」プロジェクト 1-2)

「すごい」: 直訳すると「とてもかっこいい」。これは、そのアカウントの持ち主の投稿に感心していることを表します。「ヤバイ」はいろいろな意味がありますが、要は、誰かがこのコメントをすると、あなたの投稿を気に入っていることを意味します。このコメントは、友人との日常会話で使われることが多いので、私は気に入っています。このコメントは、基本的にソーシャルメディアのほぼすべての投稿で見受けられます。「最高」という言葉は、the best という意味です。写真を投稿する人と一緒に参加した過去のイベントを表現するときに使われます。

(Post-task, 「わたしのにほんご」プロジェクト 1-2)

このように学習者は、気になった SNS の表現から、その意味や使われる具体的な状況、自国との比較など、様々に学んでいることが分かった。筆者の以前の授業案では、教師が学習内容を固定化しようという発想にあったが、今回、採用した授業案の様に、学習内容を学習者に選んでもらうという方法は、効果的であったと考える。学習者の「+1」の学びは、学習者が決めるものであったからこそ、育まれたと考える。

また、学習者のコメントには、以下のようなものもあった。

SNS で使う言葉を見ながら real 言葉をならうことができました。Padlet でコメントをたくさんしましたから習ったことを使いました。今からもできますと思います。

(Post-task, 「わたしのにほんご」プロジェクト 1-2)

私が一番面白いと思った sns 単語はウワンとびえんです。どちらの単語も泣き声のような感じを与えます。だから面白いと思いました。良い時、悪い時両方使えるの

でよく使うと思います。私がよく使うような単語はめちゃくちゃです。本当に、すごく同じ単語のようにある感情を話す時に使います。私は周りに日本人の友達が何人かいます。でも、いつも sns にコメントをしてあげたいけど、出来ませんでした。今はできます。ありがとうございます。

(Post-task, 「わたしのにほんご」プロジェクト 1-2)

このように、学習者のコメントから「今からもできます」や「今はできます」といったコメントが散見された。「SNS にコメントする」という活動を、授業の中だけではなく、日常生活の中でも使おうとする姿勢がうかがえたため、「1人ひとりの学習者にとって「+1」になる活動」になったと言えるのではないかと考える。

さらに、日本語授業を進める上でスライドを使用した。筆者は、「伝わる」スライドにとどまらず、「学びになる」スライドになるよう工夫を施した。これは、「1人の学習者にとって「+1」になる活動」にするための筆者の試みであった。

その工夫は、アニメーションを使って英語を後追いで表示させることであった。スライドは、やさしい日本語を使用し、筆者もやさしい日本語で説明した。だが、やさしい日本語であってもレベル的に理解できない学習者もいるため、これまでの授業でも、英語を使用することが多かった。しかし、英語の視覚情報や聴覚情報があると、学習者はそれだけで理解が十分で、日本語を読み取ろうとする姿勢が失われてしまう。そのため、アニメーション機能を使用し英語を後追いで表示させるようにすることで、数秒の間だが英語が表示されるまでは、日本語に挑戦せざるを得ない状況が作りだされる。この工夫により、日本語がある程度できる学習者にとっては日本語で授業が受けられる状態を、そして、日本語が全く分からない学習者には挑戦してもらいながら英語で理解を助けることができる状態をつくりだすことができたと考える。日本語の授業では、学習内容それだけが学びではなく、教師やその道具も、学習者の日本語の学びになっているということに、今後も留意したい。

3-3. 目標(3)の振り返り

(3)

1. 学習者の背景を最大限想像し（できるところは事前に情報を集め）、学習者の主体性のもとに成り立った実践を行う。
2. 私自身はサポートにまわるという意識を常に持ち実践を行う。

目標(3)の主眼は、「主体性」である。筆者は、授業考案の際に、学習者が主体性をもって活動を行える授業デザインを行いたいという強い思いがあった。この評価について、ある程度達成したが、今後の課題もあると振り返る。

筆者が「主体性」に着眼したのは、これまでの実践(5)では、「学習者のやらされてい

る感」(10/21 筆者授業ノート)が問題として挙がっていたからである。上にも記述したが、筆者は担当の実践において、SNS を公開し学習者に大量のインプットに出会わせ、興味関心のあるインプットを学習するという点において、学習者の主体性を育ませようと試みた。実践での「振り返り」では、「たまご先生」から以下のコメントがあった。

今回の授業では、自ら積極的にコメントを探していたし(学習者 A さんと G さん)、step.2 に入っても、引き続き sns からコメントを探して、スプレッドシートに記入したり、他の人にコメントしたりしていた。なぜ、積極的に授業活動に参加するようになったのかが、気になってきた。

(Moodle 「Lesson10_振り返り」)

今回の授業で驚いたものは、学生たちは積極的に新しい投稿をアップしながら、みんなの投稿にコメントすることを試みました。前回の授業では、二つ以上を投稿している学生があまりなかったです。要求された課題を終わったら、積極的に課題を取り組み姿勢が見えていなかったです。しかし、今回の授業で、みんなポジティブなコメントをもらい、それを見て、さらにシェアしようと思っています。

(Moodle 「Lesson10_振り返り」)

このように、積極的に活動に取り組む学習者の姿があった。そのため、学習者の興味関心に合わせたインプットを行った活動に一定の効果があつたのではないかと考える。

また、「主体性」を重視した今回の授業デザインについて、筆者はこのような記述を残していた。

(前回の教案は)教師として、できるだけ「何か学びを与えよう」という考えからのものでした。ですが今は、「学習者は自分たちで気づき、考え、学ぶことができる」というように、学習者を信じるのが大切であると考えています。そこで、学習者が「自分たちで気づき、考え、学ぶ」ためには、教師としてどのような仕掛けと環境を創ればよいかと考え、以下の授業案を考えました。

(Moodle 「Lesson_10 準備」)

このように、学習者の主体性を育むためには、「何か学びを与えよう」という発想から、「学習者を信じる」という発想への転換があつたことが分かった。学習者が全体的に主体的に活動に取り組んでくれたのには、教師が学習者を信じることも重要であると気づかされた。

だが、一方で、たまご先生の振り返りには、学習者の「主体性」に関するコメントには、このようなものもあつた。

今回の授業で私のグループの中にみなさんの投稿とコメントに興味を示してくれた学習者もいれば、コメントすることをタスクだと思ってあまり動かなかった学習者もいる。学習者 D さんに何回も「コメントは何個すればいいのか」と聞かれたことがある。ワークシートを作成する時も、インスタで日本語のコメントを探すのは大変だと聞いて私は「ツイッターで探してもいいですよ」とアドバイスをしたが、向こうは反応が薄くて「ツイッターのアプリ開きたくない」と応えた。

(Moodle「Lesson10_振り返り」)

このように、学習に後ろ向きな学生もいたことは事実である。この学生は筆者も記憶しているが、授業に遅れてきてしまったため、その時は、主体的になれなかった理由として、授業内容が把握できていなかった可能性があると考えていた。だが、実践(5)の中で「学習者の視点に立って教師の発話をデザインする」について話し合った経験があり、筆者のメモによると、「学習者を取りかかろうとしない時の理由」(12/9 筆者授業ノート)について、「やることが分からない」「やる必要性を感じない」「言語が分からない」「自分の日本語ニーズを理解していない」というものがあった。この時の学生の状況を考えると、「やることが分からない」よりは、「自分の日本語のニーズを理解していない」という可能性があることを考えた。そのため、教師には、「学習者自身も気づいていない学習者の日本語のニーズに気づかせる」という役割も必要であると考えた。

4. 学習者の主体性を引き出すために

これまで、実践(5)での学びを通しての振り返りを行った。次に、これらを踏まえ「日本語学習者の主体性をどのように引き出すか」についての学びを記述する。

まず、自身の学習観と教育観に気づくことが必要である。そのためには、他の教師と協働的に実践を考え、多角的な意見をもらえる環境づくりが重要であると考えた。筆者の振り返りには、「私自身の勉強の仕方(準備したい)に偏ったものであると気づくことができました」という記述があった。筆者は、これまでの言語学習を、文法積み上げ型で学んできたため、「すべての知識を頭に入れてから実践するのがいい」という学習観を持っており、それが教育観に反映されていた。そのため、学習内容を固定化することに必死で、一人一人に合ったインプットを学べる学習環境への発想転換が難しかった。学習者の主体性を発揮させるためには、学習者の状況にあった学びの環境をつくることが重要であり、そのためには、自身の学習観・教育観への批判的思考の機会が必要である。

また、このような筆者の教育観から考えると、「サポートしすぎないこと」が学習者の主体性を育むと考える。これは、実践(5)で何度も議論になった「教師が学習者を信じるとは」(筆者メモ)に関連する。筆者は、「教師が信じること」について、「教師は学習者は自分で気づき、考え、学ぶことができると信じること」が重要であると考えた。これは、教師

が全ての学習内容を与えるという思考から抜け出し、学習者の学びへの主体性を信じ教師が教育デザインを行うことに直結する。

それでは、主体性を育む教育デザインとはどのようなものなのか。これについて筆者は、「学習者に選択を与えること」であると考え。学習者は固有の状況を持っている。そのような一人一人が集まる教室では、一括に与えられる(与えてよい)学習内容は限られている。そのため、教師は、それぞれの文脈を持つ学習者が制限なく、自由に選択できる幅のある学習環境を提供することが役目である。何でもいいとなると無限に広がってしまうため、枠を設ける必要があるが、図1に示したように、一定の枠の中で学習者が自由に興味関心に沿って泳ぐことが重要であると考え。図1は、顔の記号で示した学習者の位置は、そのそれぞれの状況が異なることを、様々な方向性に動く矢印は、学習者の固有の興味関心があり学び得るものは異なるということを示している。具体的に言えば、今回、学習者は、SNSのコメント欄という枠の中で、自由に日本語の表現を学習していたということが言える。これは、図2で示した従来までの私の教育観とは対称的なものである。学ぶべき日本語の表現をあらかじめ教師が固定化せずに、学習者がその興味関心によって選んで学ぶことができたことが、主体性を育ませたのではないだろうか。

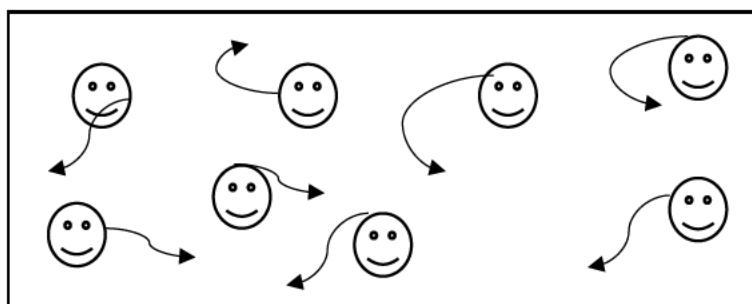


図1 枠の中で学習者が自由に学ぶイメージ図

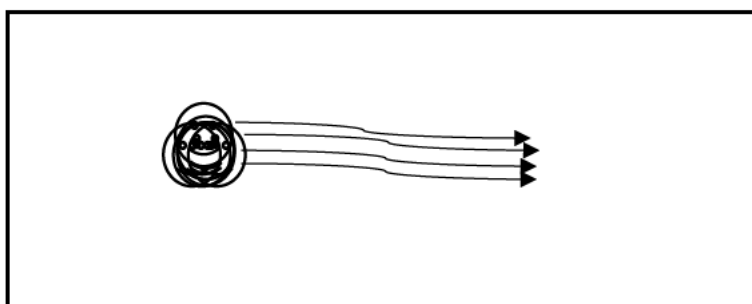


図2 従来までの筆者の教育観

5. おわりに

以上、本稿では、実践（５）の目標をもとに振り返りを行い、それを踏まえた上で、「日本語学習者の主体性をどのように引き出すか」について考察を行った。筆者自身の目標に掲げた「主体性」について大きな学びを得たのが大きな収穫であった。また同時に、このような学びを得ることができたのは、指導して下さった小林ミナ教授と、多角的な視点を次々と与えてくれた他の「たまご先生」の存在が非常に大きい。これらの貴重な経験や学びを胸に留め、これからの実践にも生かしていきたい。

-
- i 『「わたしの日本語」プロジェクト 1-2』の末尾にある数字（「1-2」）は、1 レベルと 2 レベルを指し、初級が対象であるという意味である。日本語教育センターでは、日本語レベルを 8 段階で設定しており、1 は初級、8 は超上級を示す。
 - ii 実践（５）は、小林ミナ教授による修士課程の学生に開かれる授業であり、ここでは、その教育実践を行う履修生を「たまご先生」と呼んでいる。
 - iii 「わたにほ」には授業テーマが設定されており、実践（５）において「たまご先生」は、Lesson 1 ～ 1 3 をそのテーマに基づいて授業デザインを作成する。
 - iv 「わたにほ」では、学習者への課題として Pre-task と Post-task がある。授業前と授業後に行う課題であり、どちらも担当の「たまご」先生が作成する。